

文化庁国立近現代建築資料館の川添登資料、 特に白井晟一関連資料について

[活動報告]

木原 天彦*

KAWAZOE Noboru documents at the National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, especially those related to SHIRAI Seiichi

KIHARA Amahiko

KAWAZOE Noboru (1926-2015) is one of the leading architectural and urban critics of the postwar era. Since his appearance on the architectural discourse as editor-in-chief of *Shinkenchiku* in 1953, he has pursued various aspects of the relationship between architecture and human life, with "Metabolism" in the 1960s and the Japan Society of Lifology efforts in the 1970s as prominent examples.

This paper is an introduction to the "KAWAZOE Noboru Materials" currently maintained by NAMA. However, since it is difficult to give a complete picture of this body of materials, which includes a wide variety of documents reflecting KAWAZOE's diverse work, I will focus only on the materials related to the architect SHIRAI Seiichi, for which I have conducted a comprehensive survey. This body of material, which includes correspondence and manuscripts, can be said to update the discussion of postwar architectural history, or at the very least, to provide empirical support for the claims made by KAWAZOE himself, SHIRAI, and his contemporaries.

キーワード：川添登、白井晟一、建築資料、建築評論家

KAWAZOE Noboru, SHIRAI Seiichi, architectural documents, architecture critic

1. はじめに

文化庁国立近現代建築資料館 National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs [NAMA] (以下 NAMA) は、2017年に評論家・川添登 (1926-2015) の書齋に残された資料群を一括して借用し、内容物の確認と目録の作成を進めてきた。本年度はこの資料群の目録化にいちおうの目途がついたことから、川添の自宅に残された資料を親族より新たに借用、こちらも目録化の作業を行っている。

筆者は2021年に渋谷区立松濤美術館で開催した「白井晟一入門」展【会期：第1部／2021年10月23日～12月12日、第2部／2022年1月4日～1月30日】をきっかけに、約3年の間、整理作業に立ち会いながら川添登資料を断続的に閲覧してきた。本稿ではその経験をもとに、川添資料について、特に建築家・白井晟一に関するものについてその内容を紹介したい。川添資料は、建築評論という建築設計とは異なる職能にまつわる資料であり、その内容物は多岐にわたる。それだけに、おのずと建築家の資料とは異なるアプローチでの資料整理と活用が要請される。一方で、管理上は NAMA の他の資料との一貫性が保たなければならない。本稿はあくまで白井晟一に関係する資料に限った報告であるが、これがひとつの事例となって、今後の整

理方針を考案する一助となれば幸いである。

2. 川添登と白井晟一

川添登にとって、白井晟一は特別な建築家だった。丹下健三や今和次郎もまた、川添にとって重要な建築家であったが、とりわけ白井晟一は思い入れの強い建築家であったと見られる。というのは、1950年代当時、他の二者に比べると無名の建築家であった白井は、川添が編集長であった『新建築』によって中央の建築論壇に登場し、評価を高めたからである。実際のところ、戦前からすでに建築家としての白井晟一の名は建築雑誌に見出すことができるのだが、上記の経緯から、しばしば川添は白井晟一の第一発見者としてふるまうことすらあった¹。

また、白井は川添が『新建築』誌上でプロデュースしたとされる「伝統論争」に関係した主要な建築家のひとりとしても数えられる²。白井自身も「縄文的なるもの—江川氏旧葎山館について」(『新建築』1956年7月号)をはじめいくつかの論考を発表しているが、川添もまた、「伝統と民衆の発見を目指して」(『新建築』1956年7月)などの論考を執筆し、伝統論のなかに白井晟一を位置づけた(執筆名は岩田知夫)。つまり見かたを変えれば、川添にとって、白井は単なる評論の対象を超えて、自身が

*渋谷区立松濤美術館 学芸員、東京藝術大学大学院美術研究科 博士後期課程

表1 川添登資料のうち、白井晟一関連資料の一覧

搬出リスト 箱番号	資料番号	資料番号	資料名(記載ママ)	資料名補足	資料作成年	原稿の種類	数量	単位	資料 作成者
A-4①	16-9-18		美術館としての原爆堂に関する覚書一丸木位里・俊夫妻と白井晟一交流について	武蔵野美術大学研究紀要No.42(2011) 抜刷	2012.3.1		1	点	石崎尚
	16-13-10	ファイル	—	[白井晟一氏を偲ぶ会関連資料 名簿、住所録等]	1984.11.8		1	点	
	16-15-2	ファイル	Zodiac	[機能主義に対決する日本の現代建築] [住宅建築家池田陽 ある日本の民話によせて] [■■■■さん] (■は判読不能) [原爆堂] [民族と建築 メキシコの現代建築] 『近代建築』1958年9月号 [機能主義に対決する日本現代建築 日本のベルディング 目次案]	1958年9月	直筆	1	点	川添登
	16-19-3		『近代建築』連載記事校正原稿	白井晟一論ノート 2013.02.26 2013.01.29 2012.11.20 2013.02.12 2012.12.11 2013.01.11	2012.11.20	校正 直筆	1	点	川添登
A-4②	16-25-15	ファイル	「新建築」	白井晟一関連記事スクラップ(「原爆時代に抗するもの」) 朝日新聞(朝刊)(脱落・紛失)と新建築連載	1954.6.4		1	点	川添登
	16-25-24	ファイル	白井晟一 資料(1) 一九六七	白井晟一関連資料	1970年代末～1980年代?	直筆原稿 コピー	1	点	川添登
	16-25-25	ファイル	白井晟一 資料(2) 一九六八～一九七四	白井晟一関連資料	1970年代末～1980年代?		1	点	川添登
	16-25-26	ファイル	白井晟一 資料(3) 一九七五～	白井晟一関連資料(含白井晟一の戸籍謄本)	1970年代末～1980年代?	直筆メモ	1	点	川添登
	16-25-27	ファイル	白井晟一 本人の文章	現代建築の再構築 白井晟一記事スクラップ	1978.3.14	直筆校正原稿 スクラップ	1	点	川添登
	16-25-28	ファイル	白井晟一	白井晟一自筆原稿含む関連資料「Wachsmann回想 伝統について」等(含白井晟一から川添登夫妻への手紙(直筆))	[12月10日]	直筆原稿 スクラップ	1	点	川添登
A-5	16-25-29	資料	白井晟一ノート	ノートのコピー	1930.8.5	直筆コピー	1	点	川添登
A-6	16-25-30	雑誌	S D 特集白井晟一	スペースデザイン 都市・建築・芸術の総合誌第137号	1976.1.1		1	点	鹿島出版会
	16-25-31	ファイル	建築知識 68.3 壺中の殿堂	雑誌 書籍コピー 大川ビルディング計画コピー	[1965(S30)]		1	点	川添登
	16-30-1	ファイル	白井晟一OB	白井晟一建築作品・模型写真川添登撮影写真			1	点	川添登
	16-30-2	ファイル	白井晟一	川添登の手書き原稿 黒区美術館への貸出資料一式 白井彪弼からの書簡	2001.1.29	直筆原稿	1	点	川添登
	16-30-3	ファイル	[白井晟一関連資料]	白井晟一論ノート 故白井晟一氏を偲ぶ会(招待名簿・返送はがきなど) 関連資料「二つの塔」校正原稿 白井晟一肖像写真 保田與重郎著『日本の橋』コピー 白井晟一葬儀会葬お礼等	1983.12.20	校正原稿	1	点	川添登
	16-30-7	ファイル	白井晟一	白井晟一に関する著作直筆原稿 原稿清書(写)		直筆原稿 原稿 写し 校正原稿	1	点	川添登
	16-30-9	ファイル	白井晟一資料	林芙美子著『面影』書籍サイン本 白井晟一直筆原稿「待庵の二畳」「豆腐入門」「めし」白井晟一建築写真 建築掲載誌抜き刷り等		直筆原稿	1	点	川添登
	16-38-8		[白井晟一関連資料]	白井晟一資料関連資料 高村光太郎賞白井晟一の受賞を祝う会資料、写真、『偶感』(原稿か)ほか(含白井晟一氏から川添登(長江)康子氏の計手紙5通 受賞を祝う会招待者名簿(住所))	～1960		1	点	川添登
A-13	16-39-2			国立屋内総合競技場(国立代々木競技場)1964、築地計画、神奈川県立近代美術館(神奈川県立近代美術館鎌倉館)1951、明治大学和泉校舎1960、法政大学55年館1955、晴海アパート、名古屋大学豊田講堂、旧東京庁舎、図書印刷原町工場1955、東京中央郵便局1931、香川県庁舎1958、京都公会館1960、大阪そごう、日本武道館、丹下健三郎、善照寺、新東京ビル 他写真			1	点	川添登
A-13or19	16-70-1	ファイル	[白井晟一関連資料]	写真、近代建築抜き刷り、白井晟一宛草稿、名和氏紀事上下巻					
A-13or19	16-44-22	5-22	資料：白井晟一 作品1935～69	作品集の装丁デザイン検討メモ	9.27		1	点	川添登
A-13or19	16-45-15	資料	—	川添登筆原稿(白井晟一の建築は・・・から始まる文章)		直筆原稿			
A-13or19	16-46-17	7-13	第27回朝日ゼミナール 現代建築の再構築 講師：神代雄一郎/吉阪隆正/菊竹清訓/磯崎新/村野藤吾/長谷川純/林昌二/白井晟一/原廣司/宮内康/黒川紀章/栗田勇 第29回朝日ゼミナール 続・現代建築の再構築 講師：西山卯三/前川國男/宮内嘉久/大高正人/横文彦/武藤清/東孝光/宮脇檀/藤井博巳/浦辺鎮太郎/川添登/長谷川亮/	第27回朝日ゼミナール 現代建築の再構築講義要項 資料②新しい出発点に立って—文明論的視点での思索：吉阪隆正(1977年5月20日) 資料③人間の空間の創造をはかるには—メタポリズム的思考の状況適応力：菊竹清訓(1977年5月27日) 資料④芸と建築—職人芸の視点から：村野東吾・長谷川純(1977年6月10日) 資料⑤現代建築と設計システム—大設計事務所の術と可能性：林昌二(1977年6月17日) 第29回朝日ゼミナール 続・現代建築の再構築講義要項 資料①再構築のための条件を考える：西山卯三(1977年10月4日) 資料②新旧の接点に立って：浦辺鎮太郎(1977年11月15日) [講義メモ?近代主義/地域主義/神代メモ1977-5-13]	1977		9	点	
A-19	16-47-2		白井晟一④	法隆寺1957.1新建築抜き刷り	1957.1		1	点	川添登
A-13①	16-49-1	封筒	白井作品コピー(2)						
	16-49-2	封筒	白井作品コピー(1)						
	16-49-7	ファイル	建築家人と作品	雑誌切り抜き 特集：RIAの小住宅と家具 特集：篠原一男作品集 特集：大江宏のインテリア 特集：林雅子小住宅集 建築か・人と作品(川添登)①最大限住宅と清家清(1960.2)②東京の人・芦原義信③けたはずれの新人・菊竹清訓④旋風男・浅田孝⑤旋風男・浅田孝⑥地方作家の第一人者・松村正恒⑦考える人白井晟一⑧考える人白井晟一⑨敷地を構成する大高正人⑩大衆と共にある河野道祐⑪大衆と共にある河野道祐⑫住宅の原型の作者池田陽⑬文学する建築家・谷口吉郎⑭構成派・生田勉⑮職人の流れをくむ増沢洵⑯「ムダな空間」を主張する篠原一男⑰RIAの総帥山口文象⑱建築界の良識・大江宏⑲のびのびした長女・林雅子⑳国際的建築家・坂倉順三㉑関西のまとめ役・浦辺鎮太郎㉒早大建築科の核心・武基雄㉓建築界の荒法師・横山公男㉔若い国際建築家・横文彦㉕現代建築の花形・丹下健三㉖東京ッ子大谷幸夫㉗(最終回)地球人・吉阪隆正			1	点	
	16-51-24		故白井晟一氏を偲ぶ会1984.11.8(木)銀座ポケットパーク	録音テープ	1984.11.8		1	点	
	16-56-12		90	[著作記事コピー(中にA4サイズファイル「1990・1991」を含む)]	[1990～1991]	コピー	1	点	川添登
	16-57-7	16-57-7	(記載なし)	会計事務費入出金簿 個人含む			1	点	
	16-57-12	16-57-12	[林芙美子関連資料]	・資料ファイル：林芙美子年表/追憶/泉/外国の思ひ出/ナポリの日曜日/屋根裏の椅子(書籍コピー) ・『生活詩集』コピー製本 ・『林芙美子全集8』コピー製本	[記載なし]		4	点	
	16-61-73		想林「建築家は二の足踏む 国立劇場設計の公募にさいして」白井晟一	新聞スクラップ	1962.9.15		8	点	

表2 川添登による白井晟一に関する著作一覧

通番	記事タイトル	書籍名	出版社	年月日	備考
1	最近の建築から一秋の宮村役場・白井晟一氏設計	『朝日新聞』	朝日新聞社	1954年6月4日	
2	原爆時代に抗するもの	『新建築』	新建築社	1955年4月	岩田知夫名義
3	Temple Atomic Catastrophes	Temple Atomic Catastrophes	自費出版	1955年8月	白井晟一《原爆堂》のパンフレット
4	伝統と民衆の発見をめざして	『新建築』	新建築社	1956年7月	岩田知夫名義
5	祈りの造形	『近代建築』	近代建築社	1959年5月	
6	建築家・人と作品(7)一考える人、白井晟一(1)	『木工界』	工作社	1960年8月	
7	建築家・人と作品(8)一考える人、白井晟一(2)	『木工界』	工作社	1960年9月	
8	風格高い善照寺	『読売新聞』	読売新聞社	1961年3月7日	
9	白井晟一の建築	『建築』	青銅社	1964年2月	
10	白井晟一の建築・現代文明に対するプロテスト	『ジャパン・インテリア』	ジャパン・インテリア	1964年3月	
11	白井晟一の世界	『建築文化』	彰国社	1968年2月	
12	毎日芸術賞 人と業績・白井晟一	『毎日新聞』	毎日新聞社	1970年1月1日	
13	善照寺(東京西浅草)―白井晟一氏の静かな祈りの空間	『日経アーキテクチュア』	日本経済新聞社	1978年3月	
14		『白井晟一 建築とその世界』	世界文化社	1978年	
15	滴々居と虚白庵のあいだ	『白井晟一研究V』	南洋堂出版	1982年11月	
16	白井晟一氏を悼む	『毎日新聞』	毎日新聞社	1983年12月2日	
17	推薦文	『白井晟一全集』/パンフレット	同朋舎	1987年	
18	白井晟一論ノート1	『近代建築』	近代建築社	2007年3月	
19	白井晟一論ノート2	『近代建築』	近代建築社	2007年4月	
20	編集者が見た白井晟一	『住宅建築』	建築資料研究社	2010年1月	

評論家としての歩みを開始するための重要な布石でもあったのである。

3. 整理の目的と方針

NAMA 編集の原リストを元に、白井晟一関連資料のみを抽出し、公開可能なように修正を施したものを表1に示した。なお、資料番号は搬出時の箱番号と対応している。また、この搬出時の箱番号は川添の事務所の棚や引き出しなど、資料の移動直前期の空間的配置と対応している。

今回、試みに白井晟一関連資料を大きく7つに分類した。すなわち、①：書籍や原稿のコピーやスクラップ、②：写真、③：直筆メモや草稿、④：直筆原稿、⑤：録音テープ、⑥：管理・事務手続き書類、⑦：手紙類の7分類である。以下では、この分類をもとに資料の紹介を行う。

次に、川添登による白井晟一に関わる著作の一覧を示す(表2)。いわばこれらの著作は、川添資料の情報が反映された成果物である。とはいえ、ここに記載したのは白井晟一が主たる評論対象となったものに限られている。そのため当然ながら、川添が文中でわずかでも白井に言及したテキストまで数え上げればさらに文献数が増える。また、テキスト化されなかった出来事(会議や講演、研究発表など)にも同様に川添資料の情報が反映されていると考えられるため、当然ながら考慮の対象としておかなければならない。しかし当座は、評論テキストを白井晟一に関わる主要な「プロジェクト」として

位置づけ、川添の仕事や関心の移り変わりを把握しておくことが初手の一歩となるだろう。

4. 内容について

上記の内容を踏まえて、以下では調査の過程で発見された特徴的な資料に関して、その内容を紹介したい。

4.1.1. 分類①：資料番号16-25-15

コクヨの紙ファイルに閉じられた自筆原稿と思われる記事のスクラップ帖である。背表紙には鉛筆で「新建築」と書かれており、1953年7月から1955年10月までの『新建築』の記事のスクラップが収められている。内部冒頭ページに「白井晟一論」と記され、下部に朝日新聞の記事(表2-通番1)の年月日表記があり、付近にはテープ跡があるため、記事の切り抜きが脱落したことがわかる。同一の台紙の裏面には1955年4月号の論考(表2-通番2)が貼付けられ、当ファイル内の川添による白井論はこの台紙に張り付けられたふたつのみである。

後続の台紙には『新建築』の編集後記がいくつか切り抜かれているが、時系列順にはなっていない。中に署名のない1955年3月号と10月号の編集後記がスクラップされているが、ファイルの全体的な内容物の傾向から判断して、恐らくこれも川添の執筆であると考えて問題ないだろう。包括的な川添の著作目録である、『川添登 著作目録』には、当ファイルに収められているものうち1953年7月、10月、1954年3月、4月、5月、8

月、9月、1955年1月、2月、3月の編集後記が採録されていない³。著作集の編者のひとりである寺出浩司も言及するように、同書には「追加しなければならないこと、訂正しなければならないこと」が少なからずあることがわかる⁴。今後、川添登資料の整理に伴って拡充版の著作目録が編まれる必要があるだろう。

4.1.2. 分類①：資料番号16-25-24、16-25-25、16-25-26

「白井晟一資料」と題された3分割の紙ファイルである。16-25-24に含まれる直筆原稿のコピーは、太い万年筆で書かれた草書体の文字が特徴的である。これは部分的に白井晟一の書く文字に類似するようにも思われるが、文中に白井晟一を「白井」と呼ぶ箇所があることから白井自身の筆ではないことが予想される。また、文章の一部が『白井晟一 建築とその世界』（表2-通番14）と一致することから、おそらくは川添の筆であると考えてよいだろう⁵。文章の大部分は上述の公刊された書籍にはなく、本資料は初期の草稿のようなものだろうと考えられる。内容は「松井田町役場」（1956年竣工）についてのもので、当時の松井田町長・大河原源五郎の役割など、公刊されたテキストよりもさらに詳細に当時の周辺状況を書いている。

この3冊のファイルは、表1にある通り1975年以降に作成されたものであり、草稿が挟み込まれていることなどから見ても、ほぼ確実に『白井晟一 建築とその世界』の執筆準備のために作成されたものであると考えてよいだろう。

4.2. 分類②：資料番号16-25-28

緑色の紙ファイルに綴じられた白井晟一関連資料。白井の筆による1947年までの作品一覧のメモ書きがあること、デビュー作品である「河村邸」（1937年竣工）に関与した建築家・平尾敏也に関する雑誌文献のコピーがあることから、やはり戦前の作品を包括的に論じた文献である『白井晟一 建築とその世界』（表2-通番14）の準備資料と思われる。

ここでは、このファイルのなかに、いくつかの写真資料（印画紙）が含まれていることに触れておきたい。多くは書籍の挿図となっているため、石元泰博、間瀬潜、高瀬良夫（レトリア）、大塚守夫、平山忠治といった写真家によって撮影されたものと判明する。しかしこのなかには写真家が裏面にサインを施したものがあり、これらはいわゆるオリジナル・プリントである。石元と間瀬に関してはアーカイブが存在（石元泰博フォトセンター、

及びはこだてフォトアーカイブス）するため、こうした機関とも必要に応じた連携をとり、写真作品としての保全を考慮していく必要があるだろう。

4.3. 分類③：資料番号16-38-8

黒いビニールレザー製の表紙を持つファイルである。白井晟一の高村光太郎賞受賞（1960年）を祝う会の名簿や案内状が内部に含まれる。また、白井から川添登、あるいは1959年に夫人となった『リビングデザイン』誌編集者の長江康子宛の手紙などが挟み込まれている（上記ふたつについては後述）。内容物に統一性はなく、このファイル自体がなんらかのプロジェクトのために編まれたと考えることは現時点では難しいが、内部の資料はおおよそ1950年代後半から1960年代のものと考えられる。

分類③として興味深いのは、ふたつの無記名原稿である。このふたつは、文体や言葉遣いからみて、川添のものではない。「偶感」と題された一方には末尾に（I.S.）とあるが、作者のイニシャルであろう。おそらく、『新建築』の投書欄（「Q」欄）に応募された原稿ではないかと思われる。

このふたつの原稿はどちらも、白井晟一に対する批判的な内容を含んでいることが同時代資料として特筆される。さらに興味深いことに、「偶感」には白井本人の筆跡で短いコメントが書き加えられている。ここでその内容の一部を紹介しておこう。「偶感」の一節、「おそらく此建物の魅力も非同情もその典雅な非現実にあるようである」に対して「施主には現実的である 誰にでもよろこばれる■なし」（■は判読不能）と白井のコメントがある。どことなく不機嫌そうな書きぶりではあるが、同時に、実感と個別性を重んじる姿勢はいかにも白井らしい。これが投書だとすれば、編集部に届いたそれを川添が白井に見せたのだと考えられるが、その経緯については今後の検討が必要だろう。

4.4. 分類④：資料番号16-25-28

白井晟一による直筆原稿の一例として、「Wachsmann 回想 伝統について」と題された論考がある。この資料についても稿を改めた詳細な検討が必要だが、取り急ぎ本稿では、その位置づけにのみ言及しておく。

1955年に東京大学の学生が中心となり、アメリカの建築家コンラッド・ワックスマンを日本に招いた。学生とのゼミナールを行い、12月の帰国直前には、川添がモデレーターとなり丹下健三をはじめ建築家が参加したシンポジウムが開催された。この原稿はその省察として1956年1月に書かれたものと思われ、白井がこの

シンポジウムを聴講していた物的な証拠となる。川添の手元に残った白井のこの論考はおそらく、『新建築』1956年2月号の、ワックスマン・ゼミナール特集への掲載を想定して執筆されたものだろう。白井が「縄文的なるもの」を発表するのは同年の4月であり、本格的な論考はまだ世に問われていない時期である。

ここで注目すべきは、先行研究では1957年の対談「『ギリシャの柱と日本の民衆』を読んで」以降とされる白井の「伝統の拡大」論が、すでにワックスマンへの批判として登場している点である⁶。

このことから、以下の仮説が導かれる。白井は「伝統論」に参加するなかで次第に意見を変化させたのではなく、これと向き合った当初から、伝統を普遍的・世界的で切り分け不能なものとして捉えていた。すなわち縄文と弥生の対立、あるいは東西の文明論的な対立は、白井にとって否定されるべきものに他ならなかったのではないだろうか。

このように本資料には、伝統論の思想的展開とその理解を、部分的に更新する可能性がある。あるいは、白井建築の一見奇妙な様式の混交を、思想的に理解することにも貢献するだろう

4.5. 分類⑦：資料番号 16-38-8

川添夫妻宛の白井晟一からの手紙を紹介する。筆者が現段階で数えた限りでは10通が残されているが、川添と白井の交流を考えると、本来はもっと多くの手紙が交わされたはずである。年代も1955年から70年代までと幅広く、そのうちの2通は1960年のヨーロッパ旅行の途上に、イタリアから送られている。この旅行は白井が戦後初めて海外に足を運んだ機会としてしばしば言及されるが、その反面、具体的な旅程は明らかになっていない。その点からいっても本資料は今後の実証的研究に資するものだろう。

また、なかに含まれている長江康子のみ宛てた手紙にも注目しておきたい。50年代末のものと思われ、川添や長江、大高正人らとともに過ごした団欒に対する礼が述べられている。長江が編集長を務めた『リビングデザイン』に掲載された白井の論考、「めし」や「豆腐」は、このような団欒のなかで生まれたテーマであることがすでに川添自身によって語られているが、この資料は直接的ではないにせよ、確実性の高い傍証になるものだろう。なお、文中で白井は大高との交流を特に印象深く記述しており、川添が白井をさまざまな建築家に引き合わせ、人脈の形成を促していた様子も見て取れる。

5. おわりに

以上に紹介したものはすべて、これまでの戦後建築史の議論を更新するか、少なくとも川添本人や白井、あるいは同時代の周辺の人物たちの間でまことしやかに語られてきた内容を、改めて実証的に裏付けることのできる資料群である。まもなく戦後80年の節目をむかえ、今後ますます伝聞で語り継がれてきた内容は失われてゆくだろう。このような状況下、オーラルヒストリーの記録が今後も歴史学の重要な仕事となってゆく一方で、そのような語りを吟味し、信頼性の高い歴史記述へと鍛え直してゆくための資料的基盤づくりが急務である。このような理由から、同時代に作成された資料の持つ情報は、オーラルヒストリーの伸長に伴って今後ますます欠かすことのできないものとなってゆくだろう。

ここに示した資料は川添の残したものの氷山の一角に過ぎないが、今後本資料を活用した研究と、それに連動した資料の適切なアーカイブの構築が、筆者を含めた多くの研究者の参加のもと少しずつ、着実に進展することを願う。

謝辞

本稿執筆に際して、NAMAの元研究補佐員、加藤直子さん、寺内朋子さん、そして現在の研究補佐員、秋岡安季さんには資料閲覧の機会をいただいたのみならず、さまざまな情報提供をいただきました。また、早稲田大学大学院の城戸里実さんは、2022年の夏、筆者の資料閲覧を補助してくださいました。また、川添登のご子息である歩さんにはご自宅にお招きいただき、残された資料を見せていただくと共に、ご両親についてのさまざまな興味深いお話を頂戴しました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1 川添登・内藤廣「著書の解題—9 【対談】時代を画した書籍—9 『建築の滅亡』」『INAX REPORT No.175』INAX出版、2008年、34頁。
- 2 伝統論争の歴史的パースペクティブについては、藤岡洋介「伝統論争の歴史」（『新建築 臨時増刊 建築20世紀 Part 2』1991年6月、78頁。）を参照。
- 3 真島俊一、寺出浩司、佐藤健二編集『川添登 著作目録』、株式会社ドメス出版、1997年、18–20頁。
- 4 前掲註3、222頁。
- 5 川添登『白井晟一 建築とその世界』世界文化社、1978年。
- 6 羽藤広輔「建築家・白井晟一の著作にみる伝統論」『日本建築学会計画系論文集』第80巻、第712号、2015年6月、1414頁。

(2024年12月2日原稿受理)